

『イミターショ・クリスチと詩篇』

——宮崎安右衛門覚え書(その三)——

杉  
瀬  
祐

Summary

**“De Imitatione Christi” and “The Psalms”  
the beloved books of Miyazaki Yasu-uemon  
—Miyazaki Yasu-uemon Part 3—**

Yu Sugise

Miyazaki Yasu-uemon (Dōan) (1888—1963) was a so-called Zen-Christian and very unique and famous for his thorough practice of the holy poverty imitating St. Francis of Assisi or Tōsui, a Zen Buddhist monk.

Fortunately I could have an opportunity to read his beloved books, that is, “De Imitatione Christi” and “The Psalms (of the Old Testament)” and others, which he read over and over, the former more than thirty times through his life, and which were kept with his youngest daughter, Ms. Akiyama Maria.

In this report, I will trace his spiritual struggles concerning ego, sin, between Zen Buddhism and Christianity, and also his religious development into Christian faith, from Jesus-centered religion to Christ, or the Cross-centered religion.

## 一、序

宮崎安右衛門(童安、道安、道天)に関して最近与えられた二、三の新しい事柄について報告をしたい。

昭和六十二年(一九八七年)七月十三日、書家・野澤皓月編集、発行者は野澤實、野澤リウ、発行所は白雲居による『宮崎童安遺墨書画集』が刊行された。これは野澤實(皓月)氏が夫人リウ氏(宮崎安右衛門三女)と共に昭和六十一年四月から六十二年一月まで毎月一週間から十日間位の日時を費して日本各地を廻られて、岳父宮崎安右衛門の書画類の資料を集め、野澤實氏の還暦記念として出版されたものであり、神戸女学院大学図書館にも納められている。

約一年間をかけて、各地の童安の旧知旧友に愛蔵されている書画の資料を蒐集された労は大変なものであり、また資料の数も多大であったことと思われるが、この『遺墨集』には約一〇一点が納められている。それらは書家・皓月氏の眼を通して厳選されたものであり、また童安の思想的・精神的足跡を示すに重要な資料として選別考慮された諸資料であると思われる。私のような者にはその間の深い含蓄が十分理解把握できないことは、まことに残念であり、申訳けないことであるが、そのような私にも、童安の書画の暢びやかな美しさ、彼が敬慕した良寛の如き天真無垢が感じられる。私も些か試みたことがあるが、これらは凡人が真似してみても真似しうるものではなく、根本の心境がそこまで到っていないならば生み出せるものではない。遺墨の書画のすべてがその制作年月

日が明らかとは限らないのは少々残念であるが、中には明確に年月日の示されているものもあり、また署名の童安・道安・道天などにより、およその時期が推定できて、その書画の内容、筆勢、書体などを考えれば、まことに貴重な滋味あふれる資料集ということが出来る。

さらにまた、昭和六十二年初冬に童安四女・秋山マリア氏より童安愛読の書三冊が手許にあるが、との御便りを頂き、この貴重な資料を拝借して閲覧するという思いもかけぬ好機会を与えられた。この小論は、童安愛読の書を中心にその求道の精神的苦闘の軌跡を辿り、さきに発表した「宮崎安右衛門覚え書」(その一、一九八三年十二月)(その二、一九八四年十二月)を補うかたちで発表するものである。

## 二、愛読の書

秋山マリア氏の御手許にある童安愛読の三冊とは次の書物である。

『イミターショ・クリスチ』

内村達三郎譯、岩波書店(岩波文庫)昭和三年七月十日発行・昭和七年四月二十日第二刷発行、定価六十錢(三ツ星)

昭和八年十月九日、麻布坂倉にて

(という購入の書入れがあり「東京市世田谷區北澤五ノ六八五、一如洞宮崎安右衛門」のゴム判が巻末にある)

『舊約聖書 詩篇』

東京 米國聖書協會

大正十三年十月二十三日発行

昭和三年十月二十五日三版

発行者 東京市京橋區銀座座四丁目一番地

米國人 ケー・イー・アウレル

発行所(右同)米國聖書協会

『吉川一水著 日々の糧―永遠の恩寵―』

昭和二年六月二〇日 第一刷発行

定価二八〇円

著者 吉川 一水

編者 宮崎安右衛門

発行所 東京都千代田區神田宮本町一〇

野口書店

.....

これら三冊の書物はいずれも殆んど各頁にわたって赤鉛筆、赤ペン、万年筆などの傍線がぎっしりとひかれ、いろいろの書込みがあり、また折りにふれて感銘をうけたところなどにはその年月日が記され、アーメン、インマヌエルなどのことばが残されている。秋山マリア氏も、父の魂の秘奥に触れるのがこわいような気持がして私はまだ十分には見ていません、と語っておられたが、拝借して読ませて頂いた私も童安の日記を読むような、否それ以上の恐れと戦きをもちつつ頁をめくっていったのであった。殊に『イミターショ・クリスチ』などは既に綴じ糸が切れていて触れば全部バラバラになってしまいそうな状態で、普通われわれの言う愛読書の類などではなく、まさに魂の苦闘遍歴の日夜の伴侶であったというべきものである。

『イミターショ・クリスチ』の読書記録を転記してみる。(昭和八年十月九日麻布坂倉にて、という購入の書込みがあることは既述)

巻末に

再読(註、昭和十五年)

一九四〇、四、一〇	三読
一九四〇、一二、三一	四読
一九四一、一〇、二七	五読
十七年四月五日	六読
十七年十一月四日	七読
十八年七月三日	八読
十九年三月九日	九読
十九年十月六日	十読
二十年三月二十九日	十一読
二十一年四月十八日	十二読
二十一年八月二十二日	十三読
二十一年十二月二十四日	十四読
二十二年四月十八日	十五読
二十二年七月十五日	十六読
二十二年十二月三十一日	十七読
二十三年三月六日	十八読
二十三年八月二十日	十九読
二十三年十二月二十九日	二十読
二十四年五月十六日	二十一読
二十七年一月二十日	二十二読

二十八年三月二十日

二十二読

二十九年七月五日

二十一読

三十一年八月二十九日

二十三読

三十三年九月七日

二十四読

永らく愛読して来た本書、三十五年六月に新訳がカトリックの信  
徒大沢章博士の訳が出版されたので本書と別れることとした。永  
らくこの不信の徒たる私を慰さめ励ましてくれしこの訳者内村氏  
に感謝の意を表す。

三五・六・九、一日菴童安 七十三才

三十六年六月三十日 二十五読が最後となった。旧漢訳より学びし  
こと多し。

三十七年四月二十七日 二十六読、めでたし。

(註、三十七年四月は童安七十四才)

尚、この巻末の書込み中に

『昭和二十年一月九日より一如洞を一日菴と改む。こは主キリストの  
いひ給ひし『一日の苦勞は一日にて足れり』の意味なり。アーメン。  
五十八の誕生日を迎えて——』

とあることは注目すべきである。

それは、永年(代々木草房、童心房を閉鎖して東京を引払い、田原で  
安座修行、家族は名古屋の長屋住いに移し、自身は田原と名古屋間を往  
復していたと思われる昭和一、二年の名古屋一如洞時代、そして昭和三  
年十月一日再び上京しての北澤一如洞時代)用いて来た一如洞を一日菴  
に改めた時期が童安自身の手で明確に記されている点。さらに昭和二十

年一月九日という空襲・食糧難など苛烈の度を極め日本国民挙げて自暴  
自棄的になっていった最中に記されている点である。

さらにまた、『昭和二十四年四月十日読始満十周年召天と決す』と記入  
されていて、それが棒線で消されている箇所があることも注目に値す  
る。昭和二十三年四月には『キリストの福音』が、同二十四年五月には  
『良寛・桃水・草の詩』が出版された年である(童安六十一才)。この頃  
は敗戦後の混乱、食糧事情などはまだ解決されておらず(まだ食糧も衣  
料も切符制であったと私は記憶している)やや生活的に安定してきたと  
はいえ、健康状態の回復が十分であったとは思われない。貧窮の道を自  
ら選んだ童安およびその家族にとって戦時下・敗戦直後の食糧難は大変  
なものであったろうと想像されるし、童安一家の健康状態もそう恵まれ  
た状況にあったとは考えられない(ヤミ米を食べることを拒否した判事  
が餓死したりした事件など、敗戦後の食糧難や国民の健康状態の悪さを  
示す事例は無数にある。今日の飽食享楽の時代には想像もつかぬことだ  
が——)。だから、童安が健康を害して死を覚悟した、ということも考え  
られる。だが文面からすると、むしろ自決、自殺といった求道的行詰り、  
苦悶、絶望感も感じられる。しかし残念ながら昭和二十四年頃の童安の  
精神的危機を語る記録も資料も私の手許にはない。(代々木草房時代の  
自殺の決意のことは記録が残っているが、福田武雄編『童安さんの日記  
抄』にも昭和二十四年頃のは記されていない。しかし『宮崎童安遺  
墨書画集』には、昭和二十四年に描かれた色紙「地蔵尊」および「松」  
の書幅135×34、共に長坂堯雄氏所蔵、絵の横に「明慶寺之松 童安」の  
字。また「雀地藏 童安 七十才」の絵、山田善明氏所蔵の色紙が収録

されている。また昭和二十三年の作品「竹と雀」色紙、「天下太平」128×20.5の書幅、昭和二十五年の「無心」34×132、「無事」126×33.5（六十才）、などが見出される。私には判別できかねることだが、色紙の「雀地藏」や「地藏尊」は他の時代にも数多く描かれている同類の絵と比較して格別変わったところも見うけられないし、「明慶寺の松」はそこを訪ねての揮毫であったのか、印象的写生風の鉄斎を想わせるような絵である。もちろん、童安のようなすぐれた人であるから、もし自決を考えていたとしたりむしろ益々精神的に深い充実を示した書画を描いたことであろう。それは田原時代前後や晩年の書画がひときわ充実しているのと同様であって、凡人のように精神的危機や衰えの徴候を書画の中に見出すことはむづかしからう。さらに敢えて云えば、童安の生涯、死と静かに対決することはその常住坐臥であった、とも言えるであろう。従って『イミターション・クリスチ』の末尾に一度書かれてまた抹消された言葉の意味を現在確認する手がかりはないが、読始満十周年召大と決す<sup>①</sup>はこの本が童安の精神生活の内奥といかに常に深く関わっていたかを示すものであるだろう。

『イミターション・クリスチ』は全篇が四巻に分かれていて、各巻の終り毎にもその読了の日時が記されているので、念のためにこれをも左記しておく。

第壹巻 「霊の生命に対する須要の勧告」

昭和十三年十二月三日読了

昭和十四年十月二日読了

〃 十五年八月一日読了

〃 十六年五月三日読了	
〃 十六年十二月十八日読了	
〃 十七年六月二十二日読了	
〃 十八年一月九日読了	
〃 十八年九月二十九日読了	九読
〃 十九年四月二十四日	
〃 十九年十一月二十六日	十読
〃 二十年八月四日	十一読
〃 二十一年六月十五日	十二読
〃 二十一年九月	十三読
〃 二十二年一月二十日	十四読
〃 二十二年五月三日	十五読
〃 二十二年八月二十一日	十六読
〃 二十三年一月十六日	十七読
〃 二十三年三月二十三日	十八読
〃 二十三年九月二十四日	十九読
〃 二十四年一月二十五日	二十読（六十二才）
〃 二十四年八月二十八日	二十一読
〃 二七・六・四（六十四才）	
〃 二八・七・一九（六十五才）	
〃 三〇・二・二三（六十八才）	
〃 三二・十・一（七十才）	
〃 三三・三・十二（七十一才春）	

〃 三四・二・二八 (七十二才春)

〃 三五・九・一一 (七十三才秋)

〃 三七・八・十一 (七十五才初秋)

とあり、さらに続いて

所感——本書と旧約聖書の詩へんと新約聖書のみが余が地上を去りゆく迄余の一生の伴侶たりし事を感謝す。外の本ハ記憶より忘却して了つた事を是れあきらかニ神の恩恵たるをハッキリと知つた事をアーメンと云ふ。

二三、一、一六夕

二四、一、二五朝

二四、八、二八あさ

二七、六、四あさ

二八、七、十九正午

二九、八、二十

三三、三、十二アサ

三五、九、十一

三七、八、十一

第貳卷 「内的生活に就ての誠告」

昭和十三年十二月二十三日

〃 十五年九月十日

〃 十六年五月二十六日

〃 十七年正月十日

読了

三読

四読

五読

〃 十七年七月十日

〃 十八年一月二十八日

〃 十八年十一月十八日

〃 十九年六月四日

〃 十九年十二月九日(?)

〃 二十年九月二十日

〃 二十一年七月一日

〃 二十一年十月七日

〃 二十二年二月四日

〃 二十二年五月七日

〃 二十二年九月二十日

〃 二十三年一月二十六日

〃 二十三年三月二十九日

〃 二十三年十一月三日

〃 二十四年二月十二日

〃 二十四年九月二十八日

〃 二十六年二月十八日

〃 二十七年七月二日

〃 二十八年八月二十六日

〃 二十九、九、十五

〃 三〇、三、八

〃 三一、一〇、三〇

〃 三四、五、二十一——

六読

七読

八読

九読

十読

十一読

十二読

十三読

十四読

十五読

十六読

十七読

十八読

十九読

二十読

二十一読

22

23

24

25よむ

26よむ

27

廿八読

〃 三六、一、二十〃  
〃 三七、九、八

二十九読  
(不明)  
卅〇読

〃 廿四年五月二日 二十読  
〃 廿五年二月三日 廿一読  
〃 廿六年十二月五日 廿二よむ  
〃 廿八年二月十五日 二十三読  
〃 廿九年一月九日 廿四読  
〃 三〇、一、二七 二十五読  
〃 三十三年二月三日 二十六読  
〃 三三、八、三 廿七読  
〃 三四、十一、二七 廿八読した。  
〃 三六、五、七 二十九読ありがたし。アーメン  
〃 三十七年四月一日 三十読了。アーメン

第参卷 「内心の慰安」

昭和十四年二月二十四日 読了  
〃 十五年三月十二日 再読  
〃 十五年十二月六日 三読  
〃 十六年九月十七日 四読  
〃 十七年四月三日 五読  
〃 十七年十月二十五日 六読  
〃 十八年六月参日 七読  
〃 十九年二月十五日 八読  
〃 十九年九月十八日 九読  
〃 二十年三月八日 十読  
〃 二十一年三月十七日 十一読  
〃 二十一年八月五日 十二読  
〃 二十一年十二月六日 十三読  
〃 二十二年四月四日 十四読  
〃 〃 六月二十八日 十五読  
〃 〃 十二月二十一日 十六読  
〃 二十三年三月二日 十七読  
〃 二十三年七月二十六日 十八読  
〃 〃 十二月廿九日 十九読

読了  
再読  
三読  
四読  
五読  
六読  
七読  
八読  
九読  
十読  
十一読  
十二読  
十三読  
十四読  
十五読  
十六読  
十七読  
十八読  
十九読

オウキリストイエスを仰ぐの信仰を蒙る。

第四卷 「最も厳かなる聖體の秘蹟」

この卷末は全体の終りでもある。そこに記されている日時は最初に掲げたので省略する。その日時が第四卷のみの読了の記録であるかもしれないが、あえて最初に掲げておいた。(その理由は西暦と昭和の二種類の年号が用いられているので、卷末のものが単に第四卷のみの読了日時を示すものとは私には俄かに考えられないためである。各卷末尾の日時相互の関連については、改めて深く考究する必要がある。) 煩をいとわず日時を転記したが、童安の内面的な苦闘や成長、あるいは転機が今後さらに明らかにされてゆくことがあるならば、これらの日時は大きな意味をもつことになるであろう。また本文中には折々にふれ



た書込みや別の日時の記入があり、前述のように無数の傍線がひかれて  
いる。赤鉛筆、赤インク、万年筆、あるいは書体やインクの色などに  
よって、それぞれの日時を分析追求することができれば、童安研究にお  
いて大きな手がかりになると思われるが、三〇四回ならばいざ知らず、三  
十回も繰返し読まれたその軌跡をそう簡単に分析できるとは思われな  
いので、今回は一応断念し、全体として見るに止める。

『詩篇』や『日々の糧』についても同様の事情がある。ここでは以下  
資料の取扱いについて便宜上次の如き略号を用いる。

『イミターショ・クリスチ』Ⅱ(イ)、頁数は当該版の岩波文庫の頁数  
を示し、一・十六・三は第一巻第十六章三節を示す。

『詩篇』Ⅱ(詩)、当該版の頁数、及び八・二は第八篇第二節を示す。

『日々の糧』Ⅱ(糧)、当該版の頁数、及び六〇は六〇節の「我は門な  
り」の箇所を示す。

尚、必要に応じてそれぞれの本の本文を引用するときは「――」で、  
童安の書込みは「――」で表示することとする。

### 三、キリストのまねび

『イミターショ・クリスチ』は原題 *De imitatione Christi*、日本  
語訳では「キリストに倣いて」「キリストにならう」「キリストの学び」  
などと訳されて、十数種類の邦訳がある。昔から日本人にも馴染みぶか  
い書で、聖フランシスの書などと共によく読まれて来た。昔はトマス・  
ア・ケンピス(Thomas à Kempis c. 1380-1471)が著者とされていた

が、今日の研究によると著者と目される者は、大小合せると二百人以上  
にも及ぶらしいが、その中でもオランダ人フローテ(Gerard Groote,  
Lat. Gerardus Magnus, 1340-84)やゼルボルト(Zerbolt, Gerard van  
Zuiphen, 1367-98)が有力視されており、バルバロはパリのゼルソン  
(Jean Gerson)、『モハennes・ジェルセニウス(Giovanni Gersen)な  
どの名も挙げている。この原著者究明の問題は本稿とは直接関係もない  
のでこれ以上深入りはしないが、New Catholic Encyclopedia  
(McGraw Hill) 1967はこの著者問題に詳しく触れて、基本的な草稿  
はやはりア・ケンピスまで遡ることができるとしている。神学的傾向に  
ついて聖ベネディクトやクレルヴォーのベルナルの強い影響とか十  
四世紀のオランダの近代的敬虔(Devotio Moderna)の影響とかいろ  
ろに言われるが、いづれにしても中世の神秘学派から生れた美しい花で  
あり、修徳神学の代表的な信心の書であって、その神秘的傾向は北歐的  
神秘主義よりは南歐的神秘主義、聖フランシスなどに近いと言われる。  
若い頃聖フランシスに憧れて発心した童安がこの書に魅せられ『イミタ  
ーショ・クリスチ』の扉頁のところに聖フランシスの絵を貼りつけ、死  
ぬまでキリストに従った聖フランシス」と記しているのは直観的な導き  
によるものであったと言えるであろう。神秘的と言っても決して甘美な  
情緒的陶醉ではなく、極めてきびしい内的緊張を持続し、卒直簡明な表  
現でキリストの十字架を指し示しつつ霊的な旅路、修道の歩みを教えて  
いる。この著作は一四一五年から一四二七年までの間に生れたと考えら  
れている。

さて『イミターショ・クリスチ』の訳者・内村達三郎は内村鑑三の実

弟で、慶応二年群馬県に生れ札幌農学校を卒業し、昭和九年東京で死亡、本訳は昭和三年仙台においてなされている。私の手許には昭和廿一年二月二十日春秋社発行のものと昭和二十四年十一月二〇日春秋社発行（春秋社大思想選書『基督のまねび』の二種類があるが、訳文は昭和三年岩波文庫出版のものと同じである。童安が『三十六年六月三十日、二十五読が最後となった。旧漢訳より学びしこと多し』と巻末に書込みしていることは前記したが、この『旧漢訳より学びしこと多し』は同書中に引用されている聖書本文が漢訳聖書によることは考えられないし些か意味が不明である。内村の訳文はやたらに漢字が多く、しかもかなり生硬・難解でお世辞にも読みやすいとは言えない。童安はこの漢字の多い文体から学ぶことが多かったのであろうか？ 彼が新しい大澤訳を入手して、この内村訳と訣別したのは永年の愛読書がポロポロになったためだけであらうか？

とまれ、「爾を離れて私の富まんよりも、むしろ爾の為に貧しからんを私は望ましや。爾を離れて天をわが物とせんよりも、むしろ地上にあって爾と共に私はさまよひたい。」（イ）三・五九・一、二八二頁）、「行人旅客」（イ）三・五三・一、二五九頁他）、「見よ、この哀れな裸の私、爾の聖寵を冀ひ……願くはこの飢ゑたる賤奴の私を養ひたまへ」（イ）四・一六・一、三五六頁他）など、「貧者道」に徹し、絶えず飢えと戦いさすらわねばならなかった童安にとつては、あまりにも身近かな現実的なことばであり、呼びかけであったであらう。そしてこの本の著者は自らの修道の体験を示しつつ現実的に罪を直視しそれを克服する道を教え、一步一步と導く。ひとりて摸索し彷徨した童安にとつては何

よりの先導者であり、同伴者であった。しかも彼は現実的であり厳格であり、罪の根源の肉性を衝いて止まない。それは童安の弱点を容赦なくつくものであったに違いない。童安はロマンチストであり詩的であり、肉の罪を見つめる眼はともすれば子供たちの無心や野の草や青空や小鳥たちの自然に遁れ、禅的な悟りの境地という心情主義で胡魔化そうとしていたのではなかったか。童安はイエスを愛し敬慕した。そのイエスは野の百合を見よ、空の鳥を見よ、一日の苦労は一日にて足れりと謳う自然に抱かれる自由人のイエスであった。だがピラトやカヤパと対決し、鞭うたれ血を流して十字架を負い、わが神、わが神、何ぞ我を見棄て給いしと絶望して死んでゆくキリストは、童安にとって遠い存在であったことであらう。ところが著者は童安に自然や童心に逃げ込むことを許さず、その肉の現実にとこまでも童安を釘づけにし、十字架のキリストを見上げるように強いる。

童安にとつてこの書を読むことはかなり苦痛であったことと思われる。若い頃から彼が身を刻み曝しつつ少しづつやと体裁を整えかけてきた宗教的姿勢を打ち碎き嘲笑するものを、この書の中に見出したに違いない。にもかかわらず三十数度も折にふれて繰返して読み、読みつつ対決していったことの中に、童安の比類なき誠実さ、純粋さを見出すことができるのである。

#### 四、孤独と愛の中で

童安が生涯をかけて追求したものは「自由」であった。それは言うま

でもなく精神的自由であって、物質的物欲的自由でも権力的自由などでもなかった。「脱俗無礙」の自由を現実において追求・実現することであった。しかし、現実の我は肉体をもち、さまざまな欲望や本能を持ち、この世俗の中であって物質や権力や利害損得にかこまれて存在している。「貧者道」は、世俗的現実の只中に生きながら脱俗超越を実現・実証する苛酷な試金石であって、童安がみずから自己と家族の上に課したものであった。それは観念的・空想的逃避を許さない。その緊張の中から「野の思想家」「詩人」教祖的ではない単独者的かつ人情的・友情的な「ユニークな宗教者」童安が生まれた。

だが、『イミタージュ・クリスタル』の傍線や書込みを注意してみると意外なほどに、童安は他人との人間関係に苦慮し細心である。「すべての人に汝の心を打明けな。普通世間の人と狎れ親むな。すべての人に愛を抱くべきである。けれども親狎れるは宜くない。私共も亦、自分は交際して他を敬ばせると考へたに反対し、却て自分の行の欠点が曝露して、そしてその人をして轉た反感を抱かせることがあるのである。」<sup>(イ) 一・一四</sup>「そのとほりなり、アーメン」<sup>(イ) 一・一八</sup>

「自分で自分を顧みて、そして慎んで他人を審くをするな。他人をさばくは勞して効がない、アーメンである」<sup>(イ) 一・一四</sup>而も往々間違があつて、又過失に陥り易い。されど自ら審き又考察するは、必ずその効果がある。」

「然り然り」「私共往々、内に何かの私心の潜むがあり……感情意見の阻隔のためには、朋友も別れるのである。同じ國の誼も破れてしまふ。又道者信者の間にさへも、屢ば不和が醸される」<sup>(イ) 一・一四</sup>「これ人生の事実なり、我これを体験す」

「嗚呼、人若し眞の愛の一閃光だにもつならば、確かに此の地上盡く空なる事のみ満てるを直ちに覚知するだろう」<sup>(イ) 一・一五</sup>「アーメン。人生はモーセの祈りの詩九〇に出てくるをよめば思ひ半にすぎざるものあらむ。げに人生は蓮花一朝なり。汝ら互にゆるし合へ扶け合へ愛し合へ。かくして臨終に面する者は福ひ也。」

「人が己れにあつて、又は他人にあつて匡正し得ないことは、他に神の定め給ふまで、須らく忍んで之を怵へるべきである。……人がもし既に一度二度忠告せられて、そして尚聴入れないならば汝復之と争ふな。……その種類の如何を問はず、努めて人の欠点弱点に寛大であれ。汝にも澤山あつて、そして亦他の人より寛大にされる必要がある。アーメン」汝自身をさへ、自分の欲するままにさせることができないのだ。それに、どうして他人をして汝の機嫌の向く通りさせることができようか。「然り」私共は好んで他人に完全を望みたがる。而も自分の欠点を矯めようとはしないのである。<sup>(イ) 一・一六</sup>「ほんとうにさうである アーメン。あゝ何たることぞ 咄ツツ 之がパリサイである」。

童安は苦勞人である。恐らくは通常の人の何倍、何十倍にあたる人生の辛酸を体験して、他人の情けのありがたさを味い、他人の情けによって生き存える日々を積んできた筈である。そして情けが深まり人間関係が密になるに従つて生じる裏側のいやらしさも熟知していた筈である。狎れ親しむな。一定の限界を超えるな。他人の善と倖せを願え。そうしときびしい自戒が常にあつた。一見、自由奔放とも見える彼の言行の背後には普通人以上の冷静鋭利な観察眼と暖かい同情同感があつたと思わ

れる。それゆえにこそ、多くの人々の魂に刻みこまれ、今なお記憶される彼の隻語端行の愛情や洞察の深さがあった。それらは葉書などに残る彼の短い文言の中にも看取されうる。こうして彼は矩を越えずに正しく愛し、情けを他者に与えたのだ。しかし、それは決して易々としてではなく、絶えざる自戒と努力と、またかつての幾多の失敗の体験を踏まえながら……と言うことができよう。

また驚くべきことに、世の毀譽褒貶や他人の評判、批評などに随分と神経質である。例えば、第三卷第二十八章の「讒謗者の口に対すること」などである。

「汝の平和が他人の口にあらしむるな。よしや好く言はれたとて悪く言はれたとて、それで汝の人物の変るでない。真の平和はどこにある。

真の榮はどこにある。只我に於てのみあるのではないか」<sup>24</sup>「アーメン  
3.14 24 27 29 12月 14 34 36 37  
8.24 2.17 2.26  
24 24 29 14 34 36 37  
3.14 12月 27 12月 14 8.24 2.17 2.26  
字、最初のもは24年3月14日を示す。以下同じ」故に、人の機嫌を取  
ることも求めない。又之を損ねることも恐れぬその人は、即ち大なる  
平和を享けられる。すべて心の不安や知覚の混乱は、愛にその筋道なく、  
恐怖にその理由ないより起るのである」<sup>24</sup>「汝、主に在りてのみ絶対平静絶  
対無恐怖なるを信ぜよ。二四・三・十四、二四・十二・二七、二九・十  
二・十四、三三・六・九、三四・八・二四、三六・二・一七、三七・二  
・二六」(イ)一九八頁)

全行に赤鉛筆の傍線がひかれ、自戒して戦いながら読んだ魂の記録の  
日時がそこに書き込まれている。最後の日時など、童安七十四才のとき  
であり、死の前年である。何とも凄じい魂の格闘ではないか。

童安は常に孤独であった。いや、多くの親しい友人知己にかこまれ、  
童安も多くの愛する者をもつていながら、そしてそうであるがゆえにこ  
そ、童安は孤独でなければならなかったのである。彼の究極の戦いは彼  
自らの魂の問題であった。「神のみを汝の最高の、最極の目的とせよ」と  
いう文に対して(イ)三、九、一)「汝のイサクを今日ささげろ」と記  
して、二二・五・十二アーメン、二三・一・三十一アーメン、二三・四  
・三アーメン、二四・二・二十日アーメン、62誕生日、二四・二・二十  
一日、二四・十二・一アーメン、二六・二・二七、三三・四・八、三六  
・一・二九、三六・一・三〇、三七・九・二三などの日付けが残されて  
いる。

しかし、孤独なるべき童安は愛の人であり、何にもまして愛してやま  
ない家族を身近かに抱えて俗世の現実を日々生きる人であった。「す  
べてを忍び、そして愛しまつる者の聖旨に従はうとの覚悟ない人は、到  
底愛ある者と呼ばれる値がない。愛ある者は、すべての困難辛苦をも愛  
しまつる者のために悦んで抱擁し、そして如何なる災禍に逢ふも、之を  
捨てまつることのないやうせねばならぬ。」(イ)三・五・八)「アーメ  
ン。リラ(註、童安三女)KO(註・慶応)病院よりもどり皮ギブス代  
として五千五百円前金払ひのコトバを彼女よりききしときヒヤリとせし  
が神の愛をおもひて勇キ奮ひうこき感謝す。曰く『深く穩かに神と偕に  
歩め——』神は死にし者の神に非ず生けるものの神、信ぜし者の神なり  
との示しを受く。ありがたし、アーメンである。二三・一・二九夕、試  
煉に際してバンザイを叫ぶ——まもなくこの試煉を美事にパスさせた。  
もう無事にリラの要求を充たしえたり。感謝——、わが神のみ名を讃頌

し奉る。アーメン”

これは次の第三卷第六章の「真の愛ある者の試練のこと」とも関連した童安の書込みである。

## 五、神本位の信仰

『イミターショ・クリスチ』第三卷第五十六章「全く私慾を棄て去り、十字架を負うて基督にまねびまつるべきこと」の頁は童安の書込みが非常に多い頁の一つとして挙げられよう。

「子よ、汝が自分(童安はサタンとフリガナ)を能く離脱すればするほど、益々汝は我に入ることができらう」この事、イエスのキリストなるを信ずる信仰に由りてのみ可能となる。三十三年一月三十日「から始まるこの章の童安の書込みのみをいくつか拾いあげてみよう。

“ゴノ自分トハサタンのコト。サタンを愛してはならぬ。ウツカリすると自分を知らず／＼の内に愛し事へてゐるをよくよく注意せよ。”

“身を思へば地獄。おもはざれば天國。”キリストを信する者はもはや何ものをも外にもとめずともよくなつて了ふといふ恩寵を與へられる。汝被造物を眼中に置くな。●●神のみを畏れよ。二二・六・二五、二三・七・二二、二二・二二、二二・二二”

“主に在りて虚心即是神の國である。”

“アーメン。主よ助け玉へ——二二・二・二八、二三・七・二二、二二・二二、二二・二二”

“この自分こそ自分を殺すサタンなる事を今日ハッキリ自省せしめら

れた。噫——なやめる哉、主我性のいともつよきこの自分のあくなき貪慾を主よ／＼あはれみ給へ、み心ならばこの自分を十字架につけて賜はれ、自分で此自分を殺しえず、主よアナタの能力をもてこの自分を十字架につけたまわれ。あゝひたすらなる此祈りを御名によりてきこしめし給へ。アーメン”

“被造物無視ハ神ニ息ぐる秘儀デアル。アーメン、二八・二・七”

“信ゼザル勿レ信ゼヨ(ヨハネ傳二十章二十七)” “無一物ニナツテ居ヨ”

“身びいきすな、日日眼前の十字架を負ふて死にきれ、謙遜なれ。柔和なれ。死んでおれ。是のみ汝を生かす秘事としれ。二十一年七・二二、明日のくひものなくなるといふ時、この三卷五十六章をよみて自耻自悔”

童安は自分の弱点を自知自覚していた。世俗の只中に生きながら脱俗自由無礙という現実を「貧者道」を通して実践追求することは、たしかに素晴らしいことであり、スリリングなことであり、不断の緊張にみちた詩的なことでさえある。しかし、眼前に貧と飢えに泣く妻子を見ては悟りだの、詩心だのとは云つてはおれない。この矛盾相剋の根源には「自我」の問題がある。童安が、主我的であくなき貪慾のこの私は即ちサタンと叫んでいる「我」の存在を、逃げ場を自ら封じて袋小路に追い込んでしまえば、もはや童安の手ではどうしようもなくなってしまう。生の現実の中で飢えと貧しさで生きるということは、生の中で死への道を探求し準備することである。桃水和尚や大愚良寛はそれでよかったかも知れないが、童安は寂滅以樂の道を求めたのではない。彼が求めたの

はまことの生命であり、貧と飢えを通して虚飾を剥ぎとられた本然の自由の新天地であった。それは死を生に転回し、サタンの自我を未生以前の我に生れしめるものでなければならなかった。それはすでに自力の道ではない。越すに越されぬ関門はこの肉なる自我である。童安はそこで行詰る。「自分で自分を殺しえず、主よアナタの能力をもてこの自分を十字架につけたまわれ」との悲痛な祈りは童安の行くも帰るもできぬ自己の現実の誠実な認識ではなかったか。

こうして今まで避けてきたイエスとキリストの問題、恩寵自然と十字架の問題が童安を直撃する。

第二卷第十一章「耶蘇の十字架を愛する者の少きこと」に「神本位の信仰のこと」と童安は自ら註釈を加える。

「今や耶蘇の天國を慕ふ者は澤山ある。人間本位」けれ共その十字架を負はうとする者は稀である。「神本位」天よりの慰安を得たいと望むものは澤山ある。「人間本位」けれ共患苦を受けんとする者は稀である。」

「神本位の信仰。二十一・二・三」

ここに、神本位の信仰と人間本位の信仰と対立比較は全章にわたって童安によって明確に追求され、深く自覚される。「一切を離脱して裸となった真の靈的な人は、世に殆ど見られない」「アーメン」若き日の童安の宗教心はそれが詩的であろうと禅的であろうと、根源的には人間本位の信仰であった。それが「貧者道」の実践を通して露底して来た。次の第十二章「聖なる十字架はれ天への大道なること」の文章は一字一句血の汗をしたたらせて童安が格闘していることが如実に読み取れる。「見よ、一切十字架に根據し、又一切皆己れに死する一事にあって解決する。然

り、生命に達し、又真なる心の平和に達するには、只是れ聖なる十字架と、毎日自我に死するとの途より外に、他に途はないのである」(一二〇頁)。「アーメン。二三・三・二九、二七・七・二、三〇・三・七、三四・五・一八、三六・一・二〇、三七・九・四」

この頁の肩には◎印がつけられているが、ここに記されている日時が比較的遅いことに注意すべきである。だが、ともかくも、若き日からの「貧者道」は今や「十字架の道」となり「キリストによる靈的新生の契機」へと変った。いな、変えられたと言えよう。

いまひとつの愛読書『詩篇』の巻末の余白に注目すべき書込みがある。余の五十八才の春(註・昭和二十年)まではイエスを信じてゐた。春以后はキリストを仰ぎキリストを信じキリストを拜す。人なるイエスを信じてゐたとき人間本位の信仰に生きてゐた。その人間本位の生活は、信仰は無効だった。いつも物と心は分裂し二元化して灰色であった。噫！ところが聖靈の御指導に由り始めてキリストがイエスと化せられし事に啓発されて愕然として始めて余はキリスト信者とならされた。あゝイエスへの信者でなくキリスト信者とされし事は是れ神の恩寵である。虫・ケモノに劣る余にかかる恩恵を降下して祝福を賜ふとはマコトに余は『神に愛されてゐる』といふ信仰をハッキリとよく把握せしめ玉ひし事をよるこび且つ感謝するものなり。アーメン。

◎汝は活ける神キリストなり。

昭和二十年十月二日宵

武蔵野。一日菴 童安拜書

これを先に見た一如洞から一日菴への改名と併せて考えるならば、この時期に童安の信仰に決定的な大きな変化、即ちイエスからキリストへ、人間本位の信仰から神本位の信仰へ、十字架の秘儀への開眼があったことは明らかであると言えよう。

私は前に発表した二つの論文において、童安の思想的・信仰的足跡を辿り、そのキリスト教の贖罪や十字架への開眼・転回の時期の始まりを、昭和十九年の腸出血の体験をした頃からではないかと推定した。そして後に触れる吉川一水の聖書講義などを通して彼のキリスト理解はいよいよ定着してゆくわけだが、童安のキリスト教信仰、十字架理解は今の禅的あるいは詩的信仰を完全に一掃して明確な断絶を生み出したという相には至らず、晩年にも若い頃からの思想的傾向は持続されていて、只、病气や死や患苦が迫って来たときに、キリストの十字架、贖罪、福音理解は俄かにメラメラと再びその純真な炎をあげて童安のより深く真摯な思念を私たちに明らかにしてくれることをも、前の拙論で述べた。この点に関しては私の童安理解は今も変わらない。童安の好きな春の季節、親しい道友たちと歓談するとき、出開張で各地を訪れ、なつかしい旧友知己を訪ねるとき、そうした時には陰凄な十字架と自己の贖罪の問題は影をひそめたかも知れない。親しい道友も童安の底に起った変化には気づかず、昔のままの童安と見たかもしれない。しかし、孤り童安が居るとき、病苦や死の怖れや貧窮が現実の牙をむき出して重くのしかかって来るとき、それらを見、それらと対決する童安の現実は何かが変っていた筈である。

## 六、父子聖靈一如

神中心の信仰とは、神の側から、神の視座から一切を見、一切を攝受することである。毀譽褒貶も貧も富も、幸不幸、生老病死も何もかも。そのためには単に禅的に己を空無にするだけでなく、己をカラッポにしてそこに神が現実的に支配し、しかも十字架の逆説的出来事が常にそこにかかるのでなければならぬ。たしかに『イミターシヨ・クリスチ』は、今まで童安が愛読していた名僧伝や禅語よりもっときびしく徹底的に人間の肉と罪の現実を指摘し糾弾する。それはもはや空無とか頓悟徹底とかでは済ませられるものではなく、童安は己の肉の現実を日々を負い、見つめ、戦わなくてはならなかった。「子よ、己れを棄てよ、さらば我を見出さん」(イ)三・三七・一)「アーメン。この一句にて足る。三十三年六月二十日」。そこにおいて「謙遜」とか「貧しくなること」とか「死」は今までとは全く異なる意味をもって来たのである。十字架と肉、神の支配と自我、永遠とこの世、末世と現在など、新しい緊張が童安の中に生じてきた。「今のときを忍ぶ」ということの意味が明らかになってくる。若い日の童安にとっては、貧苦患難を忍ぶということは禅的修業の一方策であったり、目標がはっきりしないままの暗中模索のものがきであったし、時にはペダンチックな痩せ我慢やポーズであったこともあるのではなからうか。それまでの修養とか徳目とかの面は消えて、「謙遜であること」「貧しくあること」「耐え忍ぶこと」は「童安のいのち」「童安が生きること」と直接に結びつく根源的な営みに変わってくる。そしてそ

れははからずも童安の若き日の出発点であったアシジの聖フランシスの中に息づいていた生命の秘義でもあったのである。『イミターシヨ』の書込みや傍線はそうした童安の靈的緊張と覚醒をまざまざと伝えてくるのである。同時に『イミターシヨ』の中で童安があまり真剣な姿勢を見せていないのは、例えば第三巻五十四章後半などの道徳的訓戒の類いと第四巻の聖体拝領の箇所（これは当然予想されることではあるが）であることも付記しておこう。

大正十五年八月七日、童安は「息」の神秘的体験をして、これをさらに深く追求し自得するために、中里介山はじめ多くの人々の引きとめるのもふり切って代々木の童心房を閉鎖、売り払った代金六〇〇円は妻子にもたせて名古屋にやり、自分はひとり三河田原に籠った。ここから「父子生気一如」の探求は本格的になってくる。この間の事情は前の二論文において詳述しておいたが、呼吸をしているのは生きている相であり、それは意識以前のことである。そして呼吸をしているのは神（自然）と一つに融合している原体験であり、一種の *unio mystica* である。彼の田原時代の「父子生気一如」は晩年に「父子聖靈一如」へと変化してゆくわけだが『イミターシヨ』の第壹巻「靈の生命に対する須要の勧告」の靈に「イキ」とフリガナをつけ、<sup>ノ</sup>靈とは息也、息は神の生命也<sup>キ</sup>、キリストの御靈とは十字架を日毎に負ふて己に死したる人を指す」と書込んでいる。また「だから、凡そ人、萬物即ち一つであり、一つに萬物帰着することを眺って、又一つの中に萬物を見ることのできるならば、その人常に安固の心を常に神に宿らして、そして晏然として神に静息し得るのである」(イ)一・三・二(註・一つの「御言」に關しての節)に

対して「萬物即「息」也」と書込んでいる。

「神を愛する靈<sup>キ</sup>(童安イキとフリガナ)の人は、神以下のものは、之を一切に輕蔑する。『アーメン』、只神のみ永遠である、無限である、萬物に普遍して、靈魂の慰安である、又心の眞の歡喜である。」(イ)二・五・三(『アーメン。二三・一・一九、大枚七百元を失ふ。このとき愕然としたが忽如として平和を賜ふ。生命を失ったよりも金を失った方がハルカニ善し——といふ啓示蒙りて我ハ深き慰さめと穩かさに浸る。アーメン。神與へ神取り玉ふ、聖名は讚むべき哉アーメン。無こそ現在の自分ニとり救ひ也、力也、光也、生命也、詩也と分らせられる。神と財とに兼ね仕ふることあたはずと知れ。汝は神に仕へよ、然して終生一貫變はる勿れ、是れ神が汝ニ命じ給ひし恩恵なりと確かに知るべし。——アーメン。二三・三・二六、アーメン。二四・二・二、アーメン。二四・九・八、アーメン 二七・六・十二、アーメン 二九・八・二九、アーメン 三〇・三・一、アーメン 三三・三・一八、三四・三・八、アーメン 三五・一・二八、アーメン 三七・八・一九。

「すべてに優り、又すべてに於て、私の靈よ、常に神にあって休息すべきである、これ聖者たち自身の永久なる憩である故である。……要するに一切萬物にまさりて、只爾にあってのみ休息するを私に許したまへ。」(イ)三・二二・一(『インマヌエル。フシイキ一如(註・父子御靈一如)

被造物無視は神に息くる秘義デアル”(前掲(イ)三・五六・三)

「父子生気一如」から「父子御靈一如」への変化の経過はこの『イミターシヨ』の中にその鍵を隠していると言うことができよう。「父子御靈



一如」は汎神論的主我の神人融合から、今や十字架を毎日に負い十字架においてわが肉を殺し、言詮不及の「神」が童安の現実においてリアルにキリストとして示現されることへと変わったのである。今や童安は行いよりも信仰を重んじる。

「子よ、汝は今之をすべて知り又読んだ。で、それを若し汝が行ふなら、汝は幸福であるだろう。我が誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者である。」(イ)三・五六・四)の「行う」を「信ずる」に書き改め、さらに消して「信行する」とし、また「守る」を「信ずる」に訂正している。そして欄外に「信ズルト云フコトト行フトイフコトトハ一也。ベツノモノニアラズ」。「信仰を本と為す、行を本とするに非ず」、信仰によりて義とせられた」と書き込んでいる。実践を重んじ、実践に生を賭して来た童安は、「信仰」「信頼」「信行」即ちキリストがわが内に息ること、神が支配することを謙虚に願う童安と変っている。

「我が與へた時でも尚我のものである。そして取返したとて汝のものを取るのではない。……汝にどんな患難を與へ、どんな逆境に汝を置かうとも、それを怨むことをするな、又は汝の心を落させるな」(イ)三・三〇・五)「アーメン インマヌエル」一切は主のもの、わがものとて毛一筋もなしと垂示をうける。三三・一・十二、三六・二・二〇(註・童安七十三才の誕生日)。「童安は禪的ではなく、創造者、贖罪者である神の手から一切を攝受して「神與え神取り給う」信仰を告白する。

「人の言は無力ナリ神(キリスト)のコトバハ永遠ナリ信ズレバ直チニ能力アラハル。人言ハ地ヨリ出テ神ノコトバハ天ヨリ下ル。人、是ヲ聞ケバスグ救ハル助ル守ラレル愛サレル、我ヲシテ世ト罪ニヨク勝利ヲ得

シムルモノハ神言ヲ信ズルコト也ト示サル。アーメン、二十一年二月七日(イ)三・四三、二二八頁の書込み)同頁には「アーメン 二十一・十一・二八、二三・二・二三アサ アーメン、三十三年正月二十日 新生記念日七十才、三十七年三月二十五日」などの記入がある。

「汝は人間である、神ではない。肉である。」(イ)三・五七・三)は赤線でかこまれ、「断じて此俺は神ではない、神性といふようなものはない」とあり、「よし、私が自ら責むべき所あるを覚えぬ(コリ前、四ノ四)とて、それで己れを私は義きものとはなし得ない。若し爾の御慈悲が去って了ふなら生けるもの一人だに爾の御まへに義とせられるはないだろう。(詩一四三ノ二)(イ)三・四六・五)に「此章全P(註・全頁か?)アーメン。十六年八月三日、十七年三月十七日再アーメン、十九年八月二十日 あはれみ給へ、コノ虫ケラ童安を——、二十八年十二月二十二日アーメン、三十三年一月廿二日」の書込みがある。

## 七、求道漂泊

『イミターショ・クリスチ』と凄絶なまでに取組む童安の真剣な求道の姿勢を何とかして伝えたいと願ったが果して幾分でも伝え得たであろうか。『詩篇』はルターなども全聖書の凝縮と呼んでいるくらい信仰と祈りの深みを集めたものである。古来多くの信仰者が日夜愛読し暗誦し、それらのことばを自己の信仰告白とし、祈りとしてきた。童安が『詩篇』を愛読したこともまた当然である。だが童安と『詩篇』との関わりを見ることは『イミターショ』どころではなく、大変な仕事である。吉川一

水著『日々の糧』は童安が一水の死後編集出版したもので、自著にひとしいこの本の中で彼の福音の師吉川一水を追憶し解説し、また卒直な批判感想を加えている。吉川一水については前の拙論において既に述べたので、ここでは繰返さない。この本は愛読書ではなく、私が秋山マリア氏から拝借したものであって、童安と一水の福音理解の關係はまた稿を改めて考えてみたいと思う。

宮崎安右衛門・童安に関して常にしみじみと教えられることは求道のきびしさである。求道の寂しさ、孤独、そして他人には領ちえぬ啓示の靈的な恵みである。

#### 伝道者の降誕節

うす汚れた雪の上に土下座し

這いずりまわって 彼は村人たちに謝った

祈り 耐え 泣き ほほえみ 働らき

開拓伝道の困難の泥沼の中に

ああ今までわが幾春秋を埋めて来たことか

それが家族のしでかした不祥事のために

一瞬に すべては瓦解し果てた

牧師先生は土下座し 嘲けられののしられ、

憫笑にかこまれて……。

もう ここには住めない。

老いた父は言った

お前が伝道者として隣人を愛することは  
良いことだ 立派なことだ

しかし、その前に家族を愛することも  
ちっとは考えてもいいんじゃないかね  
金がいるんだよ。

老父の目やにの眼はうるんでいた。

家族は何という遠い隣人だろう。

からだ中から匂いたち

全身でいつもほほえみかけているような

婚約者が言った

女は結婚して子供を産んで育てるためには

生活の安定が必要なのです。

そして 女は去っていった

伝道者はいつも呟く ひとりぼっちで。

聖言は真理であり真実である

全くその通りだ 全くだ！ 神さま……

だが もうたくさんだ！

主は私たちをキリストと同じ目に遭わせようとされる

主よ なぜですか

なぜ、今までの労苦がこんなに脆く

虚しくなってしまうのですか

主よ、あなたはちゃんと見ておられるのですか

主よ、あなたは私の涙も私の呻きも

憶えてはおられないのですか。

主は うんうんとうなずかれる

私たちは寡黙になつて

じつと十字架を見つめるばかりになる。

十字架上のキリストは何も語らない

うんうんとひとりでこの自分の苦しみに耐えているのか

負いきれない重荷と矛盾の中で

ことばも無くしてしまつたのか。

いや、彼は全身で語っているのだ

私はこのことのために生れて来た——

私は この十字架にかかるために生きてきた。

主の降誕のきびしい神秘が私たちに迫ってくる。

おん母マリアも挫折して、涙も涸れことばも無くして

ただ黙つて 神のみわざを見つめている

羊飼も博士たちも歌ったり踊ったりなんかはしない。

歌っているのは天使たちだけだ

誰も彼も みんな黙つて

ひたすらに神のみわざを見つめている

クリスマスはキリストの祭りだ

キリストだけが主役になつて

キリストだけが 見つめられ 崇められる。

うす汚れた雪も消えてしまえ

女の勾いも 人々の憫笑も

私の挫折も 心の傷手も

今までの吐息も呻きも消えてしまえ

何もかも主役の座から下りてしまえ。

誰も知らない私だけのクリスマス

いや 同じようにキリストだけを見つめている

あなたも一緒に

私たちだけのクリスマス

何時の日か 私たちも歌ったり

踊ったりする日が来ることだろう

その日は必ず来る。もうそこまで来ている。

私たちにはすでに新しいほほえみが

与えられているのだから

クリスマスはわれらが新しい誕生の夜

クリスマスは暗黒と寡黙の中での

ささやかな そしてきらびやかな魂の祝祭

宮崎童安の求道の足跡は彼の魂の奥に秘められたものであったであろう。誰も知らなくても童安はやさしい瞳をきらきらと輝かせるだけであつたろう。誰も知らない彼の孤独な苦闘と漂泊の求道の生涯の鎮魂のために、私も求道者のひとりとして拙い詩を捧げてこの報告の稿を終る。

本稿に関して野澤實・リラ御夫妻様、秋山マリア様の御好意を頂き厚く謝意を表します。また宮崎安右衛門に関する拙稿につき、当初から御教示、御指導頂きました福田與様の御急逝に接し、謹しんで哀悼を捧げます。

〔著書〕

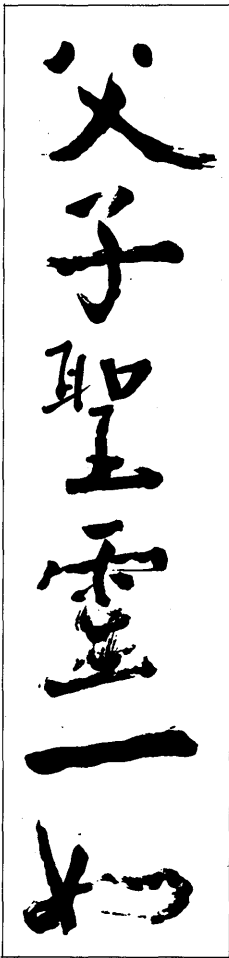
宮崎安右衛門(童安・道安)

〈・印は筆者所有・参考分〉(1988. 1)

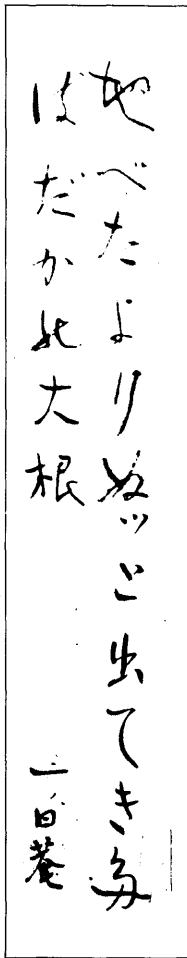
大正9年5月	乞食桃水	成蹊堂書房	
•10年1月	野聖乞食桃水	春秋社	
•10年2月	聖フランシス	杜翁全集刊行会	(春秋社版)
•10年5月	聖貧礼讃	礎部甲陽堂	
•10年10月	永遠の幼児	春秋社	
•11年4月	出家と聖貧	礎部甲陽堂	
•12年1月	聖心	総文館	
•12年5月	聖暗	春秋社	(礎部甲陽堂)
•13年1月	聖貧への思慕	礎部甲陽堂	
•13年3月	行乞十年(「聖暗」改題)	礎部甲陽堂	
•13年11月	神と真理への開眼	礎部甲陽堂	
•15年4月	永遠の童心	有光閣	(総文閣)
•15年10月	草の上の学校	平凡社	
•昭和5年3月	草に酔う者	大同館	
•8年10月	貧者道	春秋社	
10年4月	無身の生活	一如書房	(増訂改正版) 「野聖乞食桃水」 (聚英閣) 「地湧の人 桃水和尚」 (昭和7年) その他桃水和尚に 関してはいくつか の版がある
•11年9月	信仰生活の書	第一書房	
•14年11月	捨て身の生活	同文館	
•16年10月	善き人々	十字屋書店	
•17年9月	野聖乞食桃水	南北書園	
•21年5月	草の葉(訳堀井梁歩)(「ホキット マンを語る」宮崎)	春秋社松柏館	
•22年8月	無の哲学	川津書店	
22年12月	野聖桃水和尚	川津書店	
•23年4月	キリストの福音	川津書店	
•24年5月	良寛・桃水・草の詩	関書院	
27年2月	乞食桃水	東成出版社	
27年9月	信仰の悲しみ(詩集)	一日菴	
•28年6月	新釈菜根譚	川津書店	
31年9月	金原明善	大法輪閣	
33年11月	野聖桃水和尚	春秋社	
•36年7月	大馬鹿道	東海出版社	
•50年12月	地獄の聖書	福田與	
•52年3月	童安童話集	福田與	
•53年1月	童安さんの思い出と遺稿	福田與	
•53年11月	大愚の書・信仰の悲しみ(童安詩集)	福田與	
•55年9月	童安さんの日記抄	福田與	
•62年7月	宮崎童安遺墨書画集	野澤皓月	

昭和2年8月7日	童安詩歌抄	第一輯	名古屋 一如洞
3年12月1日	〃	第二輯	東京 世田谷 一如洞
4年12月25日	〃	第三輯	〃
5年12月20日	〃	第四輯	〃
6年12月25日	〃	第五輯	〃
7年12月25日	〃	第六輯	〃
雑誌 月刊「小さき者」	童安主筆		東京 一如洞
その他「光へ」(主筆 成瀬慶子)、「隣人之友」(主筆 中里介山)			
	「六合雑誌」		

幼少年時代			丁稚奉公時代			上京苦学時代			白木屋時代			宗教ルンペン時代			佐々木草房、童心房時代			田原修行時代		
年代	満才	備考	年代	満才	備考	年代	満才	備考	年代	満才	備考	年代	満才	備考	年代	満才	備考	年代	満才	備考
明治21	0	〓 武生に生れる	名古屋時代	昭和3	40	父死亡 〓 上京、北沢一如洞														
22	1			4	41															
23	2			5	42	3月「草に酔う者」														
24	3			6	43															
25	4	母死亡		7	44	12月 照峰馨山と識る														
26	5			8	45	10月「貧者道」														
27	6	4月 小学校入学		9	46															
28	7			10	47															
29	8			11	48	9月「信仰生活の書」														
30	9	大阪に丁稚奉公に出る(小学校3年中退)(うどん屋であったとか)		12	49															
31	10			13	50															
32	11			14	51	11月「捨て身の生活」														
33	12			15	52															
34	13			16	53	10月「善き人々」														
35	14	郷里に一時帰り働らく 上京、美濃家に勤める		17	54	9月「野聖乞食桃水」														
36	15			18	55															
37	16	白木屋勤務		19	56	腸出血、贖罪への目覚め														
38	17			20	57															
39	18			21	58															
40	19	受洗(同胞教会)		22	59	8月「無の哲学」、12月「野聖桃水和尚」														
41	20	(春、徴兵検査)		23	60	4月「キリストの福音」														
42	21			24	61	5月「良寛・桃水・草の詩」														
43	22			25	62															
44	23	新井ハルと同棲		26	63															
45	24	秋、妻離反		27	64	2月「乞食桃水」、9月「信仰の悲しみ」														
大正2	25			28	65	6月「新釈菜根譚」														
3	26			29	66															
4	27	(6年間の彷徨)		30	67															
5	28	伊豆、伊東を中心に		31	68	9月「金原明善」、原因不明の発熱 (31年冬から33年1月まで続く)														
6	29			32	69															
7	30	〓 胃手術、YMCA 勤務 代々木草房、童心房		33	70	〓 発熱の原因を悟る 11月「野聖桃水和尚」														
8	31			34	71															
9	32	5月「乞食桃水」		35	72	健康次第に衰える														
10	33	1月「野聖桃水」、2月「聖フランシス」 4月「無身の生活」、5月「聖貧礼讃」 10月「永遠の幼児」		36	73	1月「大馬鹿道」														
11	34	4月「出家と聖貧」、〓 牧野ひさと結婚		37	74															
12	35	1月「聖心」、5月「聖暗」		38	75	〓 歿、享年74才														
13	36	1月「聖貧への思慕」、11月「神と真理への開眼」、 〓 代々木草房閉鎖		死後出版	50	12月「地獄の聖書」 3月「童安童話集」														
14	37			52																
15	38	4月「永遠の童心」、10月「草の上の学校」		53		1月「童安さんの思い出と遺稿」 11月「大愚の書・信仰の悲しみ」														
田原修行時代	昭和2	〓 童心房閉鎖、田原へ 名古屋一如洞(2年間)		55		9月「童安さんの日記抄」														



父子聖霊一如 158×39 福田與氏所藏  
野澤皓月編『宮崎童安遺墨書画集』



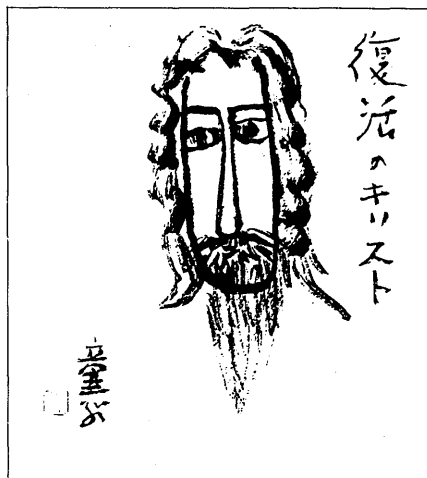
地べたよりぬつと出てきたはだかの大根 短冊 福田與氏所藏  
野澤皓月編『宮崎童安遺墨書画集』



昭和二十三年 六十歳 無事 126×335 小林八重氏所藏  
野澤皓月編『宮崎童安遺墨書画集』



昭和二十四年 地藏尊 色紙 長坂堯雄氏所藏  
野澤皓月編『宮崎童安遺墨書画集』



昭和二十九年 復活のキリスト 色紙 坂口林三郎氏所藏  
野澤皓月編『宮崎童安遺墨書画集』






エホバといふ意味は言詮不及といふことなり。神といふは伊といふことなり。當らず。宇宙の根本実在といふは母はす。系語にはY.H.V

子音のてあつては落音不可。子音の給で代はのどのいへきひとばして朝語せしむる。之がルーテルの宗教改革以後、英の宣教師がY.H.VをEをHにOをVにAを加へてエホバーと書いた。大して固有名詞で用いた。下つた。老婆深切

禪の如く、本来の面目といふはもろとが合掌以外は無い。神といふはエホバ

加へてエホバーと書いた。大して固有名詞で用いた。下つた。老婆深切

禪の如く、本来の面目といふはもろとが合掌以外は無い。神といふはエホバ



三十一年  
夏七月廿三日  
一日庵

穩坐  
歸家  
童安本日

『詩篇』の表紙の裏の記入

余の五十八才の暮までにはイエスを信じてゐた。まゝに右のキリストを仰ぎキリストを信じてキリストを拜す人なるイエスを信じてゐたとき八閉本位の信仰を生きてゐた。その人々の立つて生活の信仰は力なつた。いつも物々しい。今裂く二元化して原初であつた。さうして、この方が即ちの激務遂に由り、始めてキリストがイエスと化らねた。聖書の著されて、皆とて始めて人々のキリスト信仰とならねた。あ、イエスの信者で、キリスト信者とされしものは、是れ神の因縁物である。虫、ケモノ、物、人、かゝる因縁物を降下し、神の賜を賜ふは、神の神。愛されてゐる時といふ。信仰をハッキリとつゞく把握せしめ、しるすを、よりこび且つ感謝するものなり。ア、

昭和十一年十月二日  
六六地路。一日庵  
童安本日

『詩篇』裏表紙の余白の書込み

本書の有つ唯一の缺点是  
 因縁嚴々というてめそ〜と泣き  
 吐く公初の一画である。以ていかに公初が  
 思慮嚴に叛逆せしかと知る。  
 神はめめそめそと泣いたり愚痴するの徒を  
 作ける。遊女の口説文向みたいでイヤイヤ

吉川一水著

日々の糧

野口書店

光り(白)の成淑世史の  
 流るる流るる。マルコ伝の薄証筆が  
 のせてある約一ヶ月づついたものだ。

三十一年 九月 假年日

吉川一水著の「水初はキリストの  
 梅子ののみ」を生涯生きてゆけ  
 りた信仰の人で、重宝の  
 信仰上の光輝でもある。その  
 信仰が独立信仰である。その  
 私には約三十年以上、その  
 の著者の外、今世に稀に在  
 る。これら本が、世ある(福音書  
 編纂の外の)オノオトにと  
 んの原稿、かかれど、かある  
 ぞ、これら本が、池田三三三著  
 されてゐる。  
 吉川一水の「水初」

死者に「世」はなす、地位はなす、この世にあつた一切の關係はなす。たゞ「世」の現るのみ。  
 實際に生命の表がある。この死者の位置、その静けさ、深き生命、動もせず、静かなるが、  
 その生命、そこに生命の行方永遠が延びてゐる。大抵死者は神の生、消滅は神は  
 大用政を無初別、自由自在に、  
 衣れ白きぬの神の存するも、神は

この290葉の「世」はなす、地位はなす、この世にあつた一切の關係はなす。たゞ「世」の現るのみ。  
 實際に生命の表がある。この死者の位置、その静けさ、深き生命、動もせず、静かなるが、  
 その生命、そこに生命の行方永遠が延びてゐる。大抵死者は神の生、消滅は神は  
 大用政を無初別、自由自在に、  
 衣れ白きぬの神の存するも、神は

この290葉の「世」はなす、地位はなす、この世にあつた一切の關係はなす。たゞ「世」の現るのみ。  
 實際に生命の表がある。この死者の位置、その静けさ、深き生命、動もせず、静かなるが、  
 その生命、そこに生命の行方永遠が延びてゐる。大抵死者は神の生、消滅は神は  
 大用政を無初別、自由自在に、  
 衣れ白きぬの神の存するも、神は

この290葉の「世」はなす、地位はなす、この世にあつた一切の關係はなす。たゞ「世」の現るのみ。  
 實際に生命の表がある。この死者の位置、その静けさ、深き生命、動もせず、静かなるが、  
 その生命、そこに生命の行方永遠が延びてゐる。大抵死者は神の生、消滅は神は  
 大用政を無初別、自由自在に、  
 衣れ白きぬの神の存するも、神は